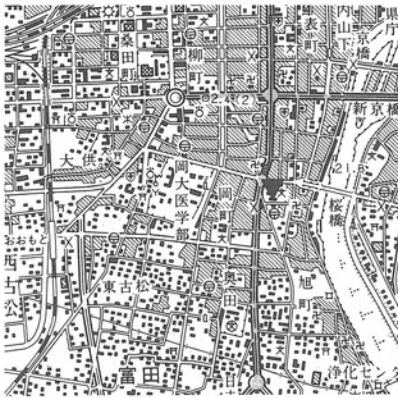


岡山・新道（清輝小）遺跡

- 1 所在地 岡山市新道
- 2 調査期間 一九九八年（平10）三月～九月
- 3 発掘機関 岡山市教育委員会
- 4 調査担当者 草原孝典
- 5 遺跡の種類 集落跡・莊園遺跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（岡山南部）

新道遺跡は、広義の岡山平野の中央を流れる旭川下流の西岸に形成された自然堤防上に位置している。この辺りは、藤原氏の氏の長者が管理する所領、いわゆる殿下渡領である鹿田庄域に含まれる可能性が高い。当遺跡より西へ〇・五kmの地点にある鹿田遺跡では、古代から中世の遺構が濃密に分布しており、地名からも同遺跡が鹿田庄の中心と考えられている。しかし、

鹿田庄は南北朝期までその存在が文献上に残っている存続時期の長い莊園であり、鹿田遺跡の周囲には少なからず集落遺跡が分布していることから、より広い範囲のなかで鹿田庄と遺跡の関係を考察する必要がある。いずれにしても、当遺跡の古代・中世の遺構面は、鹿田庄と直接関連付けられる可能性が高いことが予想される。

今回の発掘調査は、岡山市立清輝小学校のプール及び給食棟新築工事に伴い行なわれたもので、調査面積は約一〇〇〇㎡である。遺構面は大きく分けると、江戸時代（城下町）、中世、奈良時代の三面である。奈良時代の遺構面では遺構の分布が稀薄で、主なものとしては火葬に用いたと思われる長方形の土坑が検出されたのみである。

一方中世の遺構面では柱穴・土坑・井戸・溝が検出されたが、遺構の分布は調査区の北東付近だけであり、中世集落の南端部に調査区が位置するようである。ただ、根石を持つ柱穴で構成された建物と井戸の方向は一致しており、ある程度規則的な遺構配置を行なっている集落であることが窺われる。

木簡は中世の面で検出された井戸の井戸枠内から出土した。井戸は、径約二・五mの円形掘形の中央に、板を組み合わせた一辺約一・二mの方形の井戸枠を据えたもので、井戸枠内及びその上面から、土師質碗・小皿、白磁碗・壺、須恵質埴鉢や、木製品では箸・下駄・横櫛・刀形・曲物の底板などが出土している。とくに土師質碗・小皿は完形のものが多く、数層に分かれてまとまって出土した

ことから、完形土器を廃棄する祭祀が、複数回行なわれたものと推測される。この井戸の年代は、出土品から一二世紀後半と考えられる。

井戸から出土した荘園の名ないし名主と推測される久延が弁済したことを記している木簡(1)と合わせて考えると、本遺跡は荘園の経営管理を行なう施設、荘家である可能性が極めて高いと思われる。

8 木簡の釈文・内容

(1) □□御庄久延弁 (150)×16×3 019

(2) ・「大々寸魚下」 (75)×15×3 061

(3) □□ (166)×(11)×25 081

(1)の「御庄」は前述のように鹿田庄のことであろう。(2)は下部中央に欠損痕があり、軸が付いていたと推測される。

本木簡の釈読にあたり、岡山大学狩野久(当時)・久野修義・今津勝紀の各氏よりご教示を得た。
(草原孝典)

